

宮澤賢治センター通信

(岩手大学内)

(題 字／金森由利子)

第 10 号

発行人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目3番5号
電話 019-621-6672
FAX 019-621-6493
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者 岡田幸助

目次

- 巻頭言 理事挨拶……………1
- 新役員の紹介……………2～3
- 定例研究会の概要……………3～6
- 書評 宮澤賢治 愛のうた…7
- 「ミニ・茶話会」便り……………8
- 賢治と音楽の会便り……………9～10
- 経理ムベキ山登山……………10
- 宮澤賢治記念短歌会報告……………11
- 会員投稿……………12～15
- 宮澤賢治センターのロゴマーク…16

巻頭言



第十号の発刊を迎えた「センター通信」

宮澤賢治センター理事 向井田 薫

岩手大学では、平成18年6月1日の開学記念日に、平山健一学長の強いリーダーシップで「宮澤賢治センター」を立ち上げました。「どなたもどうかお入り下さい」(賢治への関心)それだけが条件です。このキャッチフレーズに誘われて、私は早速入会しました。

望月善次初代代表(当時・教育学部部長)のもとに、「センター」は魅力的な活動を展開しました。その第一は、毎月開催の「定例研究会」であり、その第二は「バスツアー」でした。「当分会費徴収ナシ」も大きな魅力です。

研究会の講師は、学内の教授陣が分担し、「ツアー」には大学のバスが提供されました。入館料や食事は、当然のことながら実費負担です。盛岡市内はも

とより花巻から小岩井農場へと足を伸ばす賢治縁りの場所めぐりは、有益で楽しいものでした。

それにも増して驚いたことは、「第1回全国宮澤賢治学生大会」の開催でした。当センターの支援もあり、全国各地の7校が参加した大会です。

会場は、賢治作品にも登場する母校の大講堂(現・農業教育資料館)であり、学生達の意欲とその力量が、ヒシヒシと感じられたものです。

6月29日に開催された第1回定例研究会の終了後、「宮澤賢治センター開設ミニ・パーティ」が大学構内で開かれました。宴の途中で司会者が、「センター」に対する希望意見を求めました。私は、①会報の発刊②会員名簿の作成、③出来れば年一回

程度の懇親会の開催を提案・要望した記憶があります。

「センター通信」第1号が、望月代表の手により、8月15日に発刊されましたし、第2号は、事務局の秋田淳子さん(人文社会科学部)の手により、翌年の2月28日に発刊されています。

この頃、私は望月代表の推挙で追加の役員となり、先輩の皆様方が、「センター」の運営に真剣に努力している姿に接し、その意図する所も次第に理解出来るようになりました。

砂山副代表以下の、人文社会科学部では、既に宮澤賢治研究会を組織し、活動を展開していたこともあり、山本昭彦・中村安宏教授が、連続して事務局長に就任いただきました。

宮澤賢治センターの第2回総

会が平成20年6月26日に開催されました。規約も新たに整備され、名簿も作成されました。新代表に岡田幸助副代表が昇格しました。終了後の懇親会には、藤井岩手大学長の出席も頂きました。私の三つの希望が叶えられた、楽しい祝宴でした。

センターの事業計画には、「宮澤賢治記念短歌会」、「経理ムベキ山登山」、「賢治と音楽を楽しむ会」も加わり、一時間に限定されていた定例研究会も、その後の「ミニ・茶話会」で内容が一層充実されています。

ここで幾つかの定例研究会に触れたいと思います。平成19年12月10日の第16回は、石田絃子前杜陵小学校長の「岩手と山梨を結ぶ『友情の樹』」で、翌年7月10日の第23回が平山健一前

岩手大学長の「保阪嘉内のおふろさとを訪問して」でした。この二つの講演が、山梨県韮崎市の保阪庸夫氏を招聘する機縁となりました。ご承知のとおり、庸夫氏は嘉内のご次男で73歳の賢

治からの手紙を大事に保管されているお方です。

平成20年12月5日の第27回は、保阪庸夫氏による「杜陵の二春秋―嘉内と賢治の盛岡高農時代―」と題する講演で、過去最高の79名の参加で、多数の質疑・応答も交わされました。

保阪庸夫氏の一行は、講演に先立って、達増岩手県知事や藤井岩手大学学長を敬訪問されました。これが翌年の記念すべき行事に繋がったのです。

平成21年6月1日から19日まで、岩手大学創立60周年記念展示が、岩手大学の図書館ギャラリーで、「アザリアの咲くとき」宮澤賢治と学友たち」として盛大に開催されました。

半年という短期間に、企画・準備されたものですが、岡田代表の手柄で、成功もたらされた記念展示であったと、大塚副学長は述懐されています。

初代望月代表が、当センターの基礎を築かれ、2代目の岡田代表が見事に開花させたその実績に、賛辞を捧げます。

そして、事務局会議から役員会へと、種々の企画を立案・検討し代表を支えた、山本・中村教授と、この4月から事務局長の大役を引き受けた佐藤竜一さんが居られることを、皆様方に御伝えたいと存じます。

新役員の紹介

私と賢治との関わり



岩手大学人文
社会科学部教授
池田 成一

岩手大学の人文社会科学部で「社会文化思想論」を教えています。

賢治についての記憶をさぐってみると、たぶん中学校の国語で「永訣の朝」を読んで感動した事、叔父が賢治に似ていると親類の間で言われていたことを思い出します。いつかは覚えていないのですが、賢治を多少読んで、青い色とベートーヴェンが好きなのが自分に似ているなと思った記憶もあります。

大学院生の時、つい先頃残念ながら亡くなられた二年先輩の岩尾龍太郎さん（西南学院大学教授、『江戸時代のロビンソン』新潮文庫など）と一年間いっしょに下宿していたことがありました。岩尾さんが賢治が大好きで、トイレにまで賢治の詩が張ってあり私も毎日眺めていました。「雨ニモマケズ」とそれまで知らなかった「政治家」の二つでした。改めて「政治家」

の詩を全文引用してみます。

「あっちもこっちも／ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつらばかりだ／羊歯の葉と雲／世界はそんなにつめたく暗い／けれどもまもなく／さういふやつらは／ひとりで腐って／ひとりで雨に流される／あとはしんとした青い羊歯ばかり／そしてそれが人間の石炭紀であったと／どこかの透明な地質学者が記録するであらう」。「雨ニモマケズ」はともかく、「政治家」の詩には、賢治の「ひとりの修羅」としての憤怒が感じられ強い印象を受けましたが、それ以上賢治に特に関心をもつことはありませんでした。

そんな私が特に賢治を研究してみようと思ったのは、六年前に国立大学が法人化されて地方国立大学の存在意義が問われるようになり、地元のことを自分の能力の許す限り研究しなければならぬと考えはじめたことがきっかけです。私は釜石の生まれで10歳で父親が名古屋の製鉄所に転勤になったときまで住んでいましたし、岩手大学に就職が決まった時、別の先輩に、自分たちの学科では地方出身で自分の出身県の大学に就職でき

た例はほとんどないと言われたので、なにかの因縁は感じていました。しかし最初は自分の専門が思想史なので、新渡戸稲造等を研究対象に考えていました。ところがたまたま私の大学院の授業に賢治専攻の院生が出席しており、最近の賢治の研究書をテキストにしてみましたところ、現代思想の観点から賢治をみるのが非常に興味深いことを発見しました。

そこで、自分が前から関心をもっていたドイツの思想家ベンヤミンの「アレゴリー」概念を賢治に適用することがどこまで可能かについて論文を書きましたが、その中で『銀河鉄道の夜』の「石炭袋」に注目したり、ベンヤミンの「アレゴリー」を「地質学」的に解釈したのは、昔毎日接していた「政治家」の無意識的記憶によるものではないかと改めて気づきました。というのは、「政治家」の詩の前半はよく覚えていましたが、最後のところは記憶から落ちていて、この自己紹介文を書くために原文にあたってみてはじめて思い出したからです。

また、実は賢治ファンの岩尾さんは今度ポストが空きそうだからと岩手大学に就職する事をねらっていたのですが、先に西南学院大学に決まってしまう、

そのかわりにその当時特に賢治ファンではなかった私が就職することになったことも、今となって見ると感慨深いものがあります。

以上が私と賢治との関わりの大略ですが、現在は、新渡戸や『遠野物語』などについても研究しているの、賢治を欧米の現代思想と対照するだけでなく、岩手の近代思想史の流れの中でとらえるという方向でも研究したいと考えているところで

賢治をコンピュータ上に再現したい



岩手大学ソフト
ウェア情報学部准教授
羽倉 淳

私は昨年の春から夏にかけて、もりおか啄木・賢治記念館で展示させていただいていた「ようこそケンジーコンピュータがつむぐ賢治の世界…仮想賢治と童話で話そう」におけるシステム構築に際して、本センターの皆様方のご協力を得たことが縁で関わりを持たせていただいております。

恥ずかしながら、宮沢賢治という人に興味を持ったことは、それまでの人生でほとんどござ

いませんでした。小学生の頃、「注文の多い料理店」が最も好きな文学作品であるという女子生徒の数の多さに惑わされて、手に取ったことはあったのですが、旧字体の読みにくさに閉口し、途中で投げ出したことを覚えております。

それ以来、ずっと、注文の多い料理店とは平和で楽しくほのぼのとした料理店の話だと勝手に思い込むことにして、かたくなにそう信じてきました。この話は、一生胸の奥にしまっておくつもりでしたが、今回、理事というあまりの重責に、良心の呵責に堪えかねて、最も場違いな場所をお借りして懺悔することになりました。

このように、賢治（どうお呼びすれば良いのかも非常に悩みますが、えいやーっ！と、こう呼ばせていただきます）に関しまして、全く無知な私ではございませんが、賢治をコンピュータ上に再現したいという観点から、現在は、賢治が他の人をどんな視線で見ているのか、ということに非常に興味を持っています。

人が人とコミュニケーションを行うときは、相手を観察する訳ですが、そのときに何をどう見て、それをどう捉え、その結果、相手との関わりがどう変わ



るのか、といったことは、その人の個性によって違うはずだ。

また、以前に牛崎敏哉先生から、賢治の作品の多層性の話を伺い大変興味を持ちました。賢治の宇宙の断片？である作品と作品の有機的なつながりから、コンピュータの賢治が、対話している相手の様子や興味に応じて、新たな断面を見せていく、そんなシステムをいつか創ってみたいという野望？大志？妄想？を胸に、理事の役目を精一杯果たしていきたいと存じます。至らぬことも多いかと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

定例研究会の概要

第43回 6月15日(火)

▽会場 農学部2号館107号室

▽講師 近代文学研究家 森 義真氏

▽演題 「宮澤賢治と佐々木喜善―「新信行」をめぐる―」

▽司会 小島 聡子
参会者 30名。

発表会場のトラブルがあり、所定の約五〇分を四〇分弱に短縮せざるを得なかったために、前置き部分を省き、冒頭から論点の核心に入った。そのため、聴講の方々にはやや難しかったことと思う。この場をお借りしてお詫び申し上げますとともに、発表内容をできるだけわかりやすくまとめたい。

ポイントは、佐々木喜善と宮澤賢治との交流の中で、一九三二(昭七)年四月と五月における宮沢家訪問時に、二人がどのような会話を交わしたのかについてであった。

賢治と喜善の交流は、(1)「ごしき童子のはなし」をめぐる、(2)花巻でのエスペラン

ト講習会開催をめぐる、(3)喜善編集の『民間伝承』をめぐる、の三点ある。

初めの「ごしき童子のはなし」は、喜善の「奥州ザシキワラシの話」(一九二〇年)などの影響を受けて賢治が雑誌『月曜』(一九二六年二月号)に発表した話であるが、これを喜善が引用したいと賢治に手紙(一九二八年八月)を出したことが交流のキッカケだった。この手紙には、以前から賢治が喜善の名前を知っていたことが示されている。

三つ目の、仙台で喜善がガリ版刷りなどの苦労を重ねて出した『民間伝承』二号をめぐる交流については、賢治の手紙からその様子をうかがい知ることができる。

問題は、(2)の花巻でのエスペラント講習会開催時、喜善の宮沢家訪問についてである。

会場の「明治屋」(賢治の親戚である関登久也の家)を紹介したのが賢治だったこともあり、喜善日記(『佐々木喜善全集第四巻』、遠野市立博物館発行)によると喜善は宮沢家を合

計六回(四月に三回、五月に三回)訪れている。ここでは誌面の都合で引用は省くが、いずれも長時間に亘って、賢治と会話を交している様子が理解できる。

特に、四月の喜善訪問時ににおける賢治は、「前回は起きあがりもできずにお目にかかって居り」(賢治書簡)というような病状においての喜善との会話であることに注目したい。単なる挨拶や講習会会場紹介へのお礼の表敬訪問というようなものではなかったことは明白である。一体、病床にあつて起き上がることも難しかった賢治と長い時間亘って喜善はどんな話を交わしたのだろうか。

一般的には、宗教・異界・民俗・ごしき童子などが話されたと伝えられている。その中でも、病床から起き上がることも



森 義真氏

難しかった賢治が聴き上手の喜善に対して、情熱を傾けて話した核心は、「新信行(しんしんぎょう)」についてではないだろうか、と考えている。

喜善日記には、「仏教の奥義をきいて来る」(五月二五日)という記述がある。賢治は国柱会に入会した法華経信者であった。また、喜善は新興宗教の大本教信者であった。二人が互いに信心する宗教の話を語り合っただけで、喜善の述べた表現に結びつくだろうか。また、喜善は賢治のことを「豪いですね、あの人は豪いですね、全く豪いです」(関登久也のエッセイ)と感嘆している。

そのように喜善が感嘆し「仏教の奥義」と捉えた賢治の話とは、法華経や大本教などの既存の宗教を超えたもの(『大宗教』(黄瀛が捉えた賢治の構想)だったのではないだろうか。その『大宗教』こそが「新信行」と同じ意味を持っていると考えている。

「新信行」とは、日常生活の中において「信じるもの」がその信心に従って行うことであり、それぞれの人が信じる宗教を基に、その信心が自然に表れる生き方を指したものだったのではないだろうか。

すなわち、日常生活の中で「新

「信行」を自然体で行う生き方を模索し、人々に理解しやすい方法で広めること、それが賢治のメモとして残された「新信行の確立」だった、と思われてならない。

(森 義真 記)

第44回 7月26日(月)

▽会場 農学部1号会議室

▽講師 岩手県立大学教授

藤田ハミド氏

▽演題 「コンピュータ芸術

「春と修羅」の世界」

▽司会 木村 直弘

参会者 13名。

コンピュータによる遠隔地での仮想ドクターとしての応用等の活用を研究中で、特に、患者から状況の掌握の上で、患者の表情、状態などの身体表現を通して全体状況や心理状態をはかり、コンピュータを活用し、状況を類推し総合的な情報の網羅から全体治療に役立てるプロジェクトを企画しているとの事。その前段階として現在「賢治プロジェクト」を立ち上げ、賢治の作品と向き合い賢治の思いを類推し、作品を読む時の表情・言葉の強弱・早さ、また、聴き手の表情を読み取り、相手の思いの類推等コンピュータを

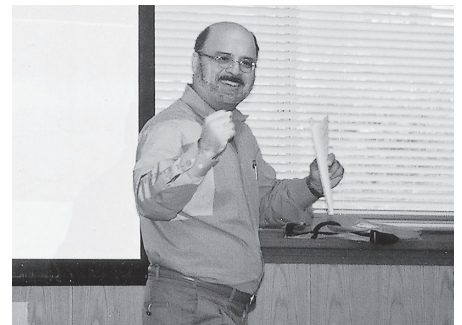
通してつかみ、それに対応するプロジェクトに取り組んでいるとの事です。

賢治は幼少期から父の影響で仏教研修会等に何時も参加し、仏教に深く影響されて来ました。そして中学時代、盛岡高等農林時代と仏教に親しんできましたが、その中で一生のバックグラウンドとなる法華經に会い大変なショックを受け、一生を決める様な影響をうけました。

その賢治プロジェクトの中で科学と宗教の関係を、コンピュータを通して探ってみようとして取り組んでいます。それは「科学と宗教」の繋がりを探る事であり、今回のテーマを「コンピュータ芸術『春と修羅』の世界」とし「春と修羅」を題材に考えて見たという事です。

「春と修羅」の捉え方としていろいろ考えられると思います。例えば「春は空 修羅は地」に擬し、その関係を通して今回考えて見たという事です。

「春と修羅」は賢治初期の作品で生前に出版された唯一の作品です。そこには「mental sketch modified」(心象風景)とつづつて居る通り、自身の心象の「内面と外景」「光と影」を著しています。そしてそれは「時間の経過に伴う内面の変化、さらにその内面を外から見



藤田ハミド氏

る別の視点」や、文章がうねっているような文の配列から、賢治の内面の動揺を表現していると言われて居ります。

これらのことから賢治の「主観と客観」すなわち、この詩を通して自身の内面を述べ、それを外から眺めその同時・並行的に別の視点から見ているという多面体の「心象風景」を述べて居ります。

また、この心象風景としての捉え方から、読経のリズムや抑揚等コンピュータを通して映像化したものを上映します。ここにも芸術とコンピュータの結合が考えられると思います。

その上で、この詩を別の角度すなわち「ランドスケープ」とスカイスケープ」の角度から今回は見たいと思います。

「ランドスケープ」は自然の姿、すなわち我々の住む現実

の世界であり「スカイスケープ」とは竜樹が述べる「空観」の世界、別な一面で言えば「理想の世界」と言えると思います。いわゆる、「春」は「スカイスケープ」であり、「修羅」は「ランドスケープ」ととらえる事が出来ると思います。

「空」は竜樹が称え、全ては実態＝自性は無く、止まる事のない因果の流れの変化相が実態で、定まっている物はないという観点です。丁度、風や川の流れが止まらぬ様に変化が実態であり、実態と思われる物は因果関係の現れで「化」とも「仮」とも言われ、釈迦はそれを「縁起」と言いました。それに対して「地」は仮に実態物としてある物を、変化せざる実態物と捉える。そこに変化する実態との乖離に悩みが起るとされます。此の事を説いたのが竜樹の「空観」とも「中論」とも言います。

それらの考えの中で、「地」と「空」の対比を以下の様にも考えられると思います。それは「地」から取れる「ウラン」は放射能汚染の心配や「石油」「石炭」等は公害や温暖化をもたらすし、「空」から得られる「太陽光」「風力」等はエコロジーであり公害を引き起こさないという観点も有り、「地」のエネルギー

ギーより理想的な「空」のエネルギーとも考えられるということとです。

結論として、仏教は「成仏」と言う「涅槃」を願ひそれを目指すものです。涅槃とは「state of being free from suffering blowing out of the fires of greed, hatred, and delusion」と言われる通り、法華經の修行の利他行を通して、「貪」「瞋(じん)」「癡」「慢」「疑」の三毒、五鈍使の根本煩惱の火を吹き消し、悩みからの自由を得る所に有ると法華經は教えています。あえて言えば、「地」より「空」への境涯をめざすのが、理想ととらえることが出来るのかとも思います。

賢治の「春と修羅」から以上の事を考え話題の提供としました。

(姉齒武司 記)

第45回 8月5日(木)

▽会場 農学部2号館107号室

▽講師 岩手大学農学部教授

広田 純一氏

▽演題 「名勝「イーハトーブの風景地」をどう伝えるか？」

▽司会 岡田 幸助

参会者 15名。



広田 純一氏

宮澤賢治にちなむ県内の7ヶ所、すなわち鞍掛山、七つ森、狼森、釜淵の滝、五輪峠、種山ヶ原、そしてイギリス海岸が、「イーハトーブの風景地」として国の名勝に指定されていることはご存知かと思う。岩手県内の名勝としてはほかに、旧観自在王院庭園、厳美溪、碓石海岸、高田松原、珊瑚島、男神岩・女神岩・鳥越山、猊鼻溪の8ヶ所があり、日本全体では359件に上る（平成22年10月1日現在）。

「イーハトーブの風景地」は従来の名勝とはいささか異なったユニークな存在である。他の名勝は、一目見ただけでその価値が納得できるような風景美を備えた場所であったり、文献等で確認できる歴史的文化的な背景・根拠を持つ景勝地であるのに対し、「イーハトーブの風景

地」は、宮澤賢治という一人の詩人及び童話作家の観察眼を通じて初めてその価値を認識された場所だからである。たとえば鞍掛山は、これといった特徴のない岩手山前衛の山であり、風景美を論じるような対象ではない。大多数の人は背景の岩手山に目を奪われるのであって、「くらかけの雪」や「Ut-kate」を想起するのはごく一部の賢治ファンだけであろう。

さて、各名勝地には保存管理計画というものがあって、名勝地の保存や整備活用のあり方が定められている。「イーハトーブの風景地」についても、平成19年度から保存管理計画の策定作業が始まっており、策定委員には、この例会でも報告されている吉見さんや牛崎さん、森さんらが参画されている。

一般に名勝の保存管理計画は、その芸術上・鑑賞上の価値を守るために、現状維持を基本とする。しかし、賢治の観察眼を通じて認識された「イーハトーブの風景地」は同じようにはいかない。第一に、釜淵ノ滝を除けば、賢治の時代とは大きく景観が変わってしまったている。イギリス海岸に至っては、地積図調査によって当時の川岸が現在の北上川の中央付近にあったことがわかっており、厳

密な意味での復元はもはや不可能である。第二に、より本質的な点であるが、そもそも「賢治の観察眼を通じて認識される価値」とは何かが問われなければならない。第三に、仮にその価値が仮定できたとして、それを来訪者に認識あるいは体感してもらうためには、それなりの情報提供や整備が必要になる。たとえば、七つ森については、七つのピークの位置を特定するとともに、それを眺められる場所を示し、必要があれば整備も考えなければならぬ。また狼森では、黒坂森や筑森、盗森の存在を知ってもらった上で、人と自然の共生の物語を伝えられるような工夫がほしい。他方、釜淵ノ滝については、賢治と生徒達の台川遡上を追体験できるような仕掛けが必要であろうし、種山ガ原の場合には、できるものなら物見山の頂上付近の灌木を取り払って、かつての放牧地のイメージを再生したいところである。

「イーハトーブの風景地」の名勝指定の理由には、「それらは彼独特の自然観及び世界観の醸成において大きな意味を持ち、やがて理想の大地を表す「イーハトーブ」の核心にまで昇華した。」とある。来訪者が各風景地を訪れて、自分なりに

賢治の「自然観及び世界観」の一端に触れられるように、いかにその場所を保存管理し、また整備活用できるか。計画策定に残された時間は限られているが、こうした点に留意して引き続き取り組んで行きたいと思っている。

（広田純一 記）

第46回 9月10日(金)

▽会場 農学部1号会議室

▽講師 エッセイスト

澤口たまみ氏

▽演題 「宮澤賢治 愛のうた」

▽司会 羽倉 淳

参会者 34名。

宮澤賢治の作品の多くは、自然界に題材をとっている。ときに「幻想的」とも言われる賢治作品だが、自然を愛する者の一人としてそれを読むとき、むしろ非常に「現実的」であることに、しばしば驚かされる。作家という人種が、大きくフィクション系とノンフィクション系の二種類に分けられるとしたら、賢治は明らかに後者に分類される。

そのことは賢治自身も十分に意識しており、『心象スケッチ 春と修羅』の「序」と『イー

ハトヴ童話 注文の多い料理店」の「序」で、いずれも「そのとほり」書いたと強調している。

賢治の年譜に、相思相愛の恋愛は記されていない。しかし、彼の書き残した言葉がほぼ実体験に基づいたものであるなら、「賢治は相思相愛の恋愛をしていた」と判断せざるを得ない。なぜなら『春と修羅』や、その前身である「冬のスケッチ」という作品群には、激しい恋心が記されている。

さらに、病に倒れた昭和六年ごろから、亡くなる直前まで書かれ続けた一連の文語詩にも、恋愛にまつわる記述が意外なほど多い。

紙面の関係で、ここではその作品名を記すに留めるが、『春と修羅』の「春光呪咀」には女性への恋心が綴られ、同じく



澤口たまみ氏

「松の針」には、妹トシではない「ほかのひと」との記述が見られる。また、同じく「マサニエロ」には、女性の名を決して明かすことができない賢治の切ない心情が綴られている。

加えて、賢治にとって自叙伝であり遺言とも言える文語詩のなかでは、「機会」に自らの恋の機会が四回あったと記し、「なべてはしけく よそほひて」の先駆形には女性との待ち合わせと思しき情景が書かれ、最終形には「一夜の旅」との言葉が記されている。

また、ノート用紙に書かれていたことから便宜的に「詩ノート」と呼ばれる一連の作品のなかに含まれる「古びた水いろの薄明窮のなかに」には、「そしてまもなくこの学校がたち／わたくしはそのがらんとした大きな寄宿舎の／舎監に任命されました／恋人が雪の夜何べんも／黒いマントをかついで男のふうをして／わたくしをたづねてまゐりました／そして何もかもすぎってしまったのです」との記述が見られる。

「この学校がたち」や「雪の夜」とあることから、この作品の内容は、賢治の勤めていた花巻農学校が郊外に新築された大正十一年の十一月から、移転作業が行われた翌三月ごろまでの出

来事であり、『春と修羅』が書かれた時期に重なる。さらに、「雪の夜何べんも」訪ねてきたところから、「恋人」は花巻市内の女性であると判断される。

以上のことから、私は、このころの賢治の恋人として最も可能性が高いのは、故・佐藤勝治氏が発見した花城小学校の代用教員、大島ヤス子であると推察し、拙著『宮澤賢治 愛のうた』（もりおか文庫）のなかに、詳しく紹介させていただいた。

そしてこの本の刊行後、ヤス子のご遺族から新たな証言が寄せられた。賢治との恋は、ヤス子の家族はみな承知していたという。

母の猛反対で恋は実らず、ヤス子は傷心のまま結婚、渡米してしまつたが、賢治に大きな影響を与えた人物として、その名は欠かせない。

（澤口たまみ 記）

第47回 10月8日(金)

▽会場 農学部1号会議室

▽講師 岩手大学人文社会科学部 家井美千子氏

▽演題 「銀河鉄道の夜」と岩手の鉄道」

▽司会 小島 聡子

参会者 31名。

宮澤賢治の残した『銀河鉄道の夜』を読む現代のわたしたちは、いつの間にかジョバンニが乗ったあの鉄道を、蒸気機関車が引く列車だと思ひ込む傾向があるように思われる。実際、現在発刊されている書籍の表紙やその挿し絵などに描かれる『銀河鉄道』は、蒸気機関車である場合が多い。

しかし、いわゆる最終形の『銀河鉄道の夜』では、ジョバンニは「それにこの汽車石炭をたいてゐないねえ。」とカムパネルラに云い、カムパネルラも「アルコールか電気だらう。」と答えているのだ。彼らは明らかに蒸気機関の出す煙を感じておらず、さらには蒸気機関車の特徴づける力強い音も聞こえてこない。むしろ、『銀河鉄道』を印象づけるのは、その静けさである。ジョバンニが気づいた時には、列車は「ごとごとごと」と走っている。駅に停車後に発車する時にも、「すきとほつた硝子のやうな笛が鳴つて」いつの間にか列車は動き出している。（『銀河鉄道』の特徴は、その静謐さにあると言っても良い。

このような『銀河鉄道』の造形がどのようになされたかを考えるために、宮澤賢治の生きた当時の岩手県や花巻における鉄



家井美千子氏

道のありようを確認し、賢治が「鉄道」にどのような印象を持っていたかを考察することが必要である。

宮澤賢治の生まれた明治29年（1896）の五年前に、青森―上野間の鉄道が開通していた。当初は私企業の日本鉄道の経営であったこの路線も、明治40年の鉄道院（後に鉄道省）発足以降、国有鉄道となり、「東北線」と呼ばれることとなる。

一方岩手県内では、明治38年設立の和賀軽便鉄道など、各地で軽便鉄道の設置の動きが盛んになっていった。その中で注目すべきなのは、花巻を起点に、西に向かう花巻電気鉄道と、東に向かう岩手軽便鉄道の開業であった。この二つの鉄道の建設は、賢治が盛岡中学に入学して以降盛岡高等農林学校卒業の間に、着々と実現していく。つ

まり賢治の「アドレックスス中葉」時期に、花巻を中心とした交通事情は急速に変化し、そうした変化に賢治は注目していただろう。

この当時の賢治の感じ方を知る資料として『春と修羅』を見ていくと、第二集の「岩手軽便鉄道 七月（ジャズ）」に顕著であるが、他に東北線や花巻電気鉄道を描いたものも大変多いことを知る。これらから推測できる賢治の「鉄道」イメージにマイナスなものはほとんどなく、近代化を約束する希望の技術として考えていたように思われる。しかし、農学校教師を辞して後の、出版されることになった「詩ノート」の一篇「藤根禁酒会へおくる」（1927・9・16の日付）には、「東の軽便鉄道沿線や／西の電車の通った地方」の住民が却って貧困となったと言う。この時期には、賢治には軽便鉄道の導入によるマイナス面が見えていたと考えられよう。こうした考えの変化が、『銀河鉄道の夜』に影響を与えたと考えることはできないだろうか。

（家井美千子 記）

書評

『宮澤賢治 愛のうた』(澤口たまみ著)

森 三紗

宮澤賢治の愛について、従来の伝記、論考を辿る時、『宮澤賢治と三人の女性』(森莊巳池著、昭和二十四年九月二十七日)が先がけとして刊行された。「真実を伝えること」によって宮澤賢治が、より人間的により偉大になるだろうと私は確信しています。・真実が批判を裁いてくれるでしょう。」と記しており真実に迫るためには批判を覚悟しなければならないことを述べている。実地調査や関係者への熱心な聞き取りが行われていた。

さて、本書は十年の歳月をか

けて上梓された。著者は賢治が独身のまま生涯を貫き、片思いや見合いをしたことがあったが、恋愛に縁がなく、時には聖人君子のイメージを作られていることへの疑問が湧いてきたのであった。エッセストであり、農学を専門としている科学者が賢治の愛を文語詩の作品に着目し、丁寧に下書稿や、「冬のスケッチ」、短歌まで辿り、解明することに駆り立てられたと言う。著者らしい鑑賞解説をし、読者を惹きつけていく。

美しい恋の歌を手掛かりにして『春と修羅』は恋愛が隠され

ていると筆者は述べている。確かに、「恋と病熱」を読むと病熱を透明薔薇と比喩し、病と苦悶するトシへの痛いほどの同情と兄妹愛が伺える。「春光呪詛」には、病む妹を除外して恋をしてよいか、自責の念や煩悶を呪う如く詠い、長編詩「小岩井農場」「マサニエロ」にも恋愛観が伺える描写もある。

著者は賢治の近隣に住み、ベートーベン風な姿で野に立つ賢治を撮影した写真店の出身の佐藤勝治の研究の影響を受け、また、高橋文彦(松田十刻)の論考を参考に、賢治と大畑ヤスの恋愛を「シゲナルとシゲナレ

スの恋」すなわち、東北本線と岩手軽便鉄道になぞって物語風に読み解いていく。二人は一時は相思相愛であったと述べ、関係者の証言も得る努力をしている。先行論文では匿名であった人名をまるで歳月が解決でもするかのように明解に解きほぐしていき読者の興味を惹きつけていく。

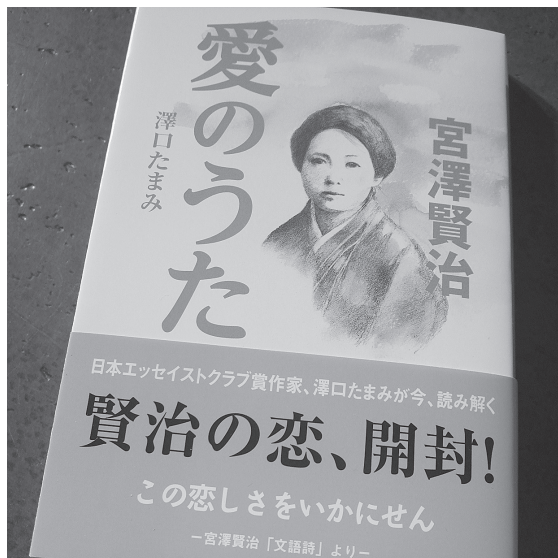
本書が伝記的物語として力作であることは認めたい。あくまでも日記を残こさなかった賢治であり恋愛の対称への宛てた書簡がない場合、『新校本宮澤賢治全集』の年譜と作品「文語詩ノート」を手掛かりにし、関係者に調査するしか方法はなく、

それ故に、精密な実証性が問われることになる。研究書ではなく物語と述べているが、いっそう真実性と責任が問われることになる。賢治は幼少のころより仏教に篤実な家に育ち帰依し、法華文学の確立を目指した。信仰と花巻農学校時代の性教育、農民芸術概論綱要の倫理観、哲学、思想をも考慮に入れると恋愛観は奔放ではなく、性欲との苦闘があつたのではない。

文語詩「機会」に四つの恋が描写されている。「恋のはじめのおとなひは／かの青春に來たりけり／同じき第二神來は／蒼き上着にありにけり／その第三は諸人の／榮譽のなかに來たりけり／いまお、その第三は諸人の／榮譽のなかに來りけり／いまお、その四愛隣は／な

んたるぼろの中にきしぞも」。最終行の「ぼろ」は恒産がなく心身とも悲惨で不安定な境遇にきた恋と解釈したい。第一の恋は片思いの岩手病院入院に世話になった高橋ミネである。青春の悶えが感じられる恋の短歌も書いている。著者は賢治とミネの二歳の年齢差があるという佐藤勝治の説を取り入れ否定している。しかし、盛岡高等農林学校の『宮澤賢治とその周辺』の編集並びに発行人であった川原仁左衛門がグラビアに写真を載

せ「賢治は親切な看護婦に初恋をいだいた。」と書いている。川原の妻が日詰出身で高橋の近所の出身であつたため特定できたと聞いている。川原説を取り、二年ほど前、北海道札幌市近郊の関係者をたずねたところ、あながち否定は出来ないと思うにいたつた。問題は二歳の年齢の差であるが、高橋ミネの写真と戸籍謄本を見せて貰った。やはり同年齢ではない。ミネがさばを読んで賢治に年齢を言つたのか、賢治がさばを読んで父政次郎に結婚したい人がいると願ひ出るときの方便として年齢を同年齢と云つたのか定かではない。文語詩「公子」は、賢治が父の説得を受け入れざるを得なかった初恋の複雑な心理を叙述した詩である。第二の恋を著者はヘレン・タピングとしているが、賢治の高等農林時代の友人太谷正之の妻の妹藤原キミは、当時女子師範の女学生であり、岩手女子師範は着い制服を着用していた。吉見正信氏の説によると、賢治は用事もないのによく盛岡市肴町の小西屋というお菓子屋を訪問してきたと大谷はエッセイ「大平和」第七巻に書きしるしているという。本書は賢治作品を通して賢治の恋愛が真実かどうか問を投げかける物語風な著作である。



『宮澤賢治 愛のうた』定価800円(税込み)

この本を購入希望の方は、下記の版元に直接お問い合わせ下さい。

盛岡出版コミュニティー

〒020-0811 盛岡市川目町23-1
TEL・FAX 019-681-1451

「ミニ・茶話会」便り ——茶一話——

「宮澤賢治センター通信」で「ミニ茶話会」での様子を毎回載せて頂いており、今回もその様子の一端を紹介させて頂きます。

○ 賢治さんは「遠野物語」の佐々木喜善氏とも親交が有り、亡くなる前年昭和七年佐々木喜善氏は何度も賢治さんの自宅を尋ねていました。その喜善氏との縁で賢治さんの「ざしき童子（ぼっこ）のはなし」が著されたとのことです。

その中で講師から「思索メモ」を通し、特に「新信行の確立」が賢治さんと喜善氏の話題の中心ではなかったか、との新しい「思索メモ」の捉え方に目を開かれる思いでした。

それは「思索メモ」の「序」に続いて「科学に威嚇されたる信仰」を通し、① 科学的、物理的に「一、異空間の存在」そして「分子—原子—電子—真空」を改めて見直し、特に「真空」についてはあえて「異単位」また「異構成」とことわりを入れる賢治さんの天才は、現代の宇宙物理学に通ずる四次元観、「真空」観と、ビックバン以前に起きたと言われる「インフレーション宇宙論」が予見され、② 信仰的に「菩薩仏並び…」を通して「十界の存在」と③ 「心的因果法則」を通し「因縁」の実在性を述べ、④として「幻想」「夢」では無く「実在」の科学といえる「新信行の確立」の出發を図ったのではないかとの思いがいたしました。次々と思いがつのる大変に啓発される講師のお話でした。

「信行」とは信心修行をいい、これに學を加え「信行學」が仏道修行の基本と言われ、また、「信行具足」が信仰の理想型とも言われて居ります。佐々木喜善氏は「聴き方のうまさ」という点では確かに天下一品」との評判通り、賢治さんが日頃思っているも発言しないでいた事を引き出し「豪（えら）いですね」「豪（えら）いですね」と喜んで、その賢治さんの「思索」をメモしたものが「思索メモ」ではなかったかと思えます。

講師の深い解釈に触発され感謝の思いの一時でした。

○ コンピュータを通した医療への新しい取り組みの方向性を知り、また音響を映像化するソフトで声明（読経）を映像化する等思いがけない講座に嬉しい思いでした。

また「春と修羅」で春を「スカイスケープ」、修羅を「ラン



茶話会風景

ドスケープ」ととらえる観点、スカイスケープを「空間・理想世界」に、ランドスケープを「現実世界」と捉える観点、また、エネルギーとして取り出す際エコロジの観点から「スカイスケープ」を太陽光発電や風力発電等の無公害性から、また、「ランドスケープ」をウラン、石油、石炭を代表とした公害問題等の視点から見ると斬新さにひかれるものがありました。

この講座の中に賢治さんの法華経に関する話が有りましたが、法華経には「二処三会」といい、釈迦が法華経を説いた場所が二カ所有り三回説法が有ったとされています。それは靈鷲山という場所がインドにありますが、そこでの説法を靈鷲山会（現実の世界）といい、また虚空会（己心・理想の世界）との二カ所で説法は行なわれた。そして説法は前靈鷲山会と虚空会

と後靈鷲山会と三回行なわれたと法華経には述べられて居ります。これを「二処三会」と言いますが、この中で虚空会は「スカイスケープ」に、靈鷲山会は「ランドスケープ」に当てはまるのではないかと思います。我々の毎日の生活に当てはめると「こう有りたい」と自身の理想を描いて、現実世界で苦闘をして行く姿が「春と修羅」の世界と合致するのではと思います。朝計画をたて、日中現実社会でその実現を目指し、夕べに今日はどうだったか思い浮かべる。その形の行動をこの講座を通し教えられる思いでした。思わぬことで啓発を受けた思いでした。

○ 名勝「イーハトーブの風景地」として文化財保護法により鞍掛山、七つ森、狼森、釜淵の滝、五輪峠、種山ヶ原の6箇所が名勝の記念物として、平成17年3月2日指定され、平成18年イギリス海岸が新たに含まれ7カ所になったそうです。理由としては、宮澤賢治という詩人、童話作家が風景上の価値を認識し、作風に重要な意味を持った文化的景観とのことで、それらを次世代に伝達することを目的にしている法律との事です。

賢治さんを取り巻く風景も変化の中に有り、その維持は大変な事を改めて知り、我々の協力

の必要性の思いを新たにいたしました。

○ 「銀河鉄道の機関車は蒸気機関車でしょうか」との問いから始まる講義は、自身の常識をひっくり返される思いでした。何時も蒸気機関車が天空を走っている絵のみ見ていた為、何の不思議も感ぜず居りましたが、賢治さんの当時の岩手県一の鉄道の建設状況との対比では電車とも蒸気とも決定付ける事は出来得ないので、「銀河鉄道の夜」の「第三次稿」の文章に明確に「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」とか「石炭をたいていない？ 電気だろう。」とか「この汽車は、スティームや電気で動いていない。」等書かれています。その上、松本零士氏の「銀河鉄道999」で1980以降から、蒸気機関車が書かれ出したとのことでした。蒸気機関車という常識はこの文章からあり得ないと認識しました。

それにしても、「良く発見出来たものですね」との問いに講師の方は「中世文学は文章を読み切っていく事が大事です。そうするとよくわかる面が多いのです。今回も同様に読み上げてみたのです。」との事に二度納得でした。

賢治と音楽の会便り

○「賢治と音楽を楽しむ会」も30回を数えました。

私は「五感」とも「五識」とも言いますが、何時も「感覚」が瑞々しく生き生きとしたいと思っています。ご存知の通り「五感」は「見る」「聞く」「かぐ」「味わう」「触れる」をいい、また「五識」は同様に「眼識」「耳識」「鼻識」「舌識」「身識」、それに「意識」を加え「六識」となります。賢治さんは「唯識」と言っているんですが、「七識」の「末那識」と「八識」の「阿頼耶識」が加わったものが「唯識論」と言います。その内の「意識」迄はどう活性化していくか常々考えてまいりました。その意味でも「聴く」という行為から「耳識」を大事にして参りたいと思っております。

いわゆる「入力作用」と「出力作用」が何時も生き生きしている為には、先ず「入力」を大事にし、そして「出力」していきたく思っております。

○ 先日岡田暁生氏の新書「音楽の聴き方」(第19回吉田秀和賞)に ①音楽を「感性の次元」で聴く。次いで、②「音楽の言語化」、そして、③「言語とし

ての音楽」④⑤として「歴史性」「社会性」の文脈で聴くとの指摘が有りました。私は常々考えてきた事と同感するものを覚えました。

それは我々の目指す賢治さんの聴いたと言われる作曲家、①作品を各人聴き込み、②その感じたことを述べ合い、また、④⑤賢治さんが発した言葉を確認し合い、また賢治さんならどう感想を言うだろうと話し合いを通し、賢治さんに迫ってみたいという事です。

○ 今回は、ピアノの詩人、ショパン生誕200年を記念し、賢治さんが聴いたと言われる「マズルカ」を聴きました。ショパンのピアノ曲で「マズルカ」(ポーランドの農民の踊り)「エチュード」(練習曲)「プレリュード」(前奏曲)「ポロネーズ」(ポランドの曲)「ノクターン」(夜想曲)「ワルツ」(円舞曲)等あるうち、マズルカ3曲、エチュード・ワルツ・ポロネーズ各1曲を聴きました。そして、また「ピアノ協奏曲第1番」を聴き、最後に「エチュード」を1曲聴きました。その際、マズルカを賢治さんはどんな思いで聴いたのか、賢治さんの聴いた年代と生活の状態を手がかりに、それぞれの思いを述べ合いました。また「弦楽四重奏曲」を聴きたい

とのリクエストが有り、それを聴く機会を持つ事にしました。

○ また、マラー生誕150周年を記念してマラーの「交響曲第5番」を聴きました。記録としてはどうも賢治さんはマラーを聴いたふしはないようです。同時代のグリーグ、コルサコフ、ドビッシューは聴いているのですが、それは、マラーの曲は近年もてはやされる様になった事と、長大な曲が多く、レコードには中々馴染まなかったのではないかと考えられます。賢治さんがこれを聴いたらどういった感想を持ったか、想像し合い話合いました。聴いたCDは、バーンスタインの指揮ウィーンフィルで、特に第4楽章「アダージェット」は、トーマスマン原作でビスコンティ監督の「ベニスに死す」のバックグラウンドに流され有名になったものです。

○ また、前回リクエストがあった「弦楽四重奏」は、賢治さんも聴いているハイドンの「雲雀」を聴きました。いかにも天空を飛ぶ雲雀の様な一小節が有ります。

また、賢治さんはブラームスの「交響曲第3番」を聴いておりますが、賢治さんはベートーベンに大いに触発され「ベートーベンに負けない作品を」と

の思いで作品を書いたと言われて居りますが、ブラームスもやはり「ベートーベンに負けない作品を」との思いで21年かけて「交響曲第1番」を書いたと言われて居り、お互いに作曲と文学と違いが有りますが、ベートーベンに触発されている事は同じとの思いで聴きました。今後4番迄ブラームスは聴く事にしました。

ブラームスに関しては、当時の指揮者のリヒターは、「第1番」をベートーベンの「第10番」と語ったと言われております。その中にベートーベンの第九の一部とも思われる小節が出てきて文字通り、ベートーベンが目標である証明とも言えると思います。

また、「第2番」はブラームスの「田園交響曲」とも言われる様に静かな、ゆったりした曲想です。またここで、ブラームスの「ハンガリー舞曲第5番」を聴きました。

○ 月に一度一時間半程、何かにと忙しい毎日の中で、他に何も気に止めず音楽に没入する時間を取る事も「聴く」感性を育む意味で大事な事と思っております。どうか「賢治と音楽を楽しむ会」に参加され共に楽しまれま

すようお待ちしております。
(姉齒武司 記)

ここで参加者の植原さんの感想を載せたいと思います。

植原 幹雄 (名古屋在住)

少々雑感を述べます。私が岩手県及び岩手大学へ行くようになって、もう三年あまり経過しました。ことの発端は岩手大学のシニア・サマーカレッジでした。私が居住している名古屋は、大変気候のむし暑いところ

で、岩手県なら涼しく、避暑になると思ったのです。その上温泉もあるし、食べ物もうまそうだし。事実その当時は快適な夏を過ごすことができました。その後、気候温暖化の影響が岩手県といえども、結構暑くなった気がします。

宮沢賢治のことは、シニア・サマーカレッジ以前から知って

言っているように、「川と銀行木のみどり」が豊富なことです。結構都会でありながら、こんなに自然豊かなところは、私は他に知りません。理想郷（イーハトーブ）といっても過言ではないと思います。また、しし踊りや剣舞やさんさ踊りなどすぐれた郷土芸能が継承され今も演じられていることも大きな魅力だと思います。

岩手大学の魅力は岩手県の魅力とも重なりますが、なんといつてもその豊かな樹木です。そのフイトンチッドは当然健康によいであろうし、そこに住む鳥や虫やかえるやミツバチにも癒されます。

私は現在宮澤賢治センターの「賢治と音楽を楽しむ会」に毎月名古屋から参加して居ります。ここでは、賢治が聴いた曲を中心に毎月簡単な解説とクラシックを楽しんで居ります。特に、木造の百年記念館は音響もすばらしく、部屋そのものが音響ホールとなつて、フルオーケストラで奏でる様な、BOSE Eから出るどんな大音量でも箱（部屋）が共鳴効果を起し、また、木材が乾燥し切つて居り、天候のまま適度の湿り気等を受け、どんなコンサートホールにもひけをとらない共鳴の音響になつて居ると思つてお

ります。

また、建物が百年の経過を刻み、この場所に賢治が共に居て、このような立派な音を共に聴き惚れて居る様を思いつつ、毎月楽しみにして通つて居ります。また、四季を通し自然の移り変わりを肌と感じ、特に春、夏、秋時は音楽の世界と開放された窓を通して小鳥のさえずりが一体になり、田園を聴いた際は小鳥が喜びを表している様な気がしながらの一時でした。皆さんと共に楽しみたいと思います。皆さんの参加を歓迎します。

次に岩手県の飲み物について言うと、私が気に入っているのは日本酒とビールです。日本酒は亀の尾が好きです。ビールは遠野産のホップを使用したビールがうまいと思います。それから小岩井の牛乳もうまいと思います。

食べ物についてはまだ十分堪能していませんが、あわびとほやがおつだと思います。ほやは初めて食べた時は、かなり抵抗がありました。今ではだいぶ慣れました。地方国立大学法人の予算厳しきおりではあります。岩手大学はイーハトーブの拠点・ポラーノの広場であつてほしいと切に思います。

「経埋ムベキ山登山」 第6回 南昌山登山

「南昌山に登って」

平成22年7月17日、経埋ムベキ山の7番目の山として南昌山に登った。経埋ムベキ山とは賢治が雨ニモマケズ手帳で32の山に法華経を埋めて欲しいと願った山である。わが宮澤賢治センターではこれまで愛宕山、岩山、胡四王山、姫神山、岩手山、種山に登った。参加者は9名で、望月、江刺家、岡田幸助、岡田信子、森、千葉、北田、佐藤、吉田（敬称略）。バスは正門を出発、車中で自己紹介をした。今まで南昌山に登ったことのある人は参加者の内2名で、その人によると登山道に階段があつて、結構きつかったと感想が述べられた。矢巾温泉登山口から5合目までなだらかな坂道を2時間、演歌を口ずさみながら（？）登った。つまり息を吐きながら登るのが良いそうである。4 kmの道は緑に包まれ気分爽快であつた。道ばたにはガクアジサイやエンゴソウの紫のかわいい花が咲いていた。5合目から山頂までは階段である。段差が高いもの、低いものが不規則につながっているので結構きつかった。6合目で二人がギブアップして、5合目で待っている

てくれることになった。6合目と7合目で小休止、汗は滝のように流れる。8合目と9合目のサインはまだか、まだかと思つている間に、見落として通り過ぎてしまい、一気に山頂に到着した。山頂には木製の展望台が作られていて、そこから雫石方面の下界が見渡せた。弁当を食べ、記念撮影をして、山を下りた。登りより下りの方が体のバランスを崩しやすく、つらかつた。5合目では待機組の二人と合流した。帰りの下り道では、足が前に出て、体が残りの結構つらく、こんなに長い道を来る時歩いたのかと思ひなくらいであつた。途中で「幣（ぬさ）がけの滝」に寄った。子供たちが4、5人川の浅瀬で服のままキャッキヤと言いつつ水遊びをしていた。女性群も裸足になり、冷たい水に足をつけて気持ち良さそうであつた。汗がすっかり引いたそうであつた。幣とはマタギが山の神に供える紙や布のことだそうである。矢巾温泉登山口でバスが待っていてくれた。少し下ったところに賢治碑があり、バスを降りて見学した。碑には賢治の



登山メンバー（岡田は撮影につき写っていません）

短歌が2首掘り込まれていた。碑の表面がピカピカでなかなか読み辛い。まくろなる 石をくぐればなほもさびし 夕日は落ちぬ山の石原

毒ヶ森 南昌山の一つらはふとおどろたち わがぬかに来る

宮澤賢治

森義真さんが朗読し、望月先生が解説してくださつた。なんと贅沢なツアーであらう。碑の建つているところから南昌山がよく見える。あの山頂までついさつき登つたとは思ひられないくらいである。帰り道のバスの中ではそれぞれ登山の感想を述べ、大学に到着した。40人乗りの大型バスに9人の参加とはもったいないので、次回もつと宣伝して、多数の方が参加されるよう希望する。望月先生、江刺家さん、バスの運転手さんありがとうございました。

（岡田幸助 記）

宮澤賢治記念短歌会報告

会員 佐藤 静子

短歌会は望月先生のミニ講義が始まる。十月は嘉内の故郷で開かれた「花園農村の碑・碑前祭」に関連して、「保阪嘉内・宮澤賢治アザリア記念会」会報「アザリア七号」から、浜垣誠司氏による「保阪嘉内の歌曲とDTM（藤井青年団唱歌）」と、河本義行についてのお話があった。現在歌い継がれている団歌が、嘉内の詞と少し違っている事が分かる。

会報には河本一家の写真が載っているが、七人の子供のうち小さい子は両親に抱かれ、大きな男の子たちは胸を張り少し誇らしげである。河本は鳥取から岩手の高等農林に入学する時、妻を娶っている。妻も盛岡に住んでいた時期があった。河本は「緑石」の号で俳句を作り、地元では俳句の河本緑石として顕彰されている事はよく知られている。高等農林時代、「アザリア」の仲間で、文学的に先んじていたのは河本であったろうという望月先生のお話であった。賢治は文学的にはむしろ晩熟で、決して「アザリア」の中心ではなかったというお話もな

された。

ミニ講義の後、短歌の合評会となる。名前が伏せられた各人の歌が一覧となり渡される。四十首以上集まるが、その中から優れていると思う歌、あるいは気になる歌を五首選び、点数の多い順にコメントする。先生からの指導は直接無いが、歌人としての先生の読みの確かさから来る評に、考えさせられる事が多い。最後に個人名の記された歌が配布される。個人毎に並べられた歌は、又別な味わいがある。連作した歌はばらばらになると目立たなくなる事がある。一首で成り立つ歌、連作で力を持つ歌それぞれである。今回は、六月〜十月の歌から四首ずつ選んでみた。この夏は記録的な猛暑であった。随分と遠い日の出来事のように思える。その夏の記憶として一首ずつ猛暑（あるいは夏）の歌を入れてみた。さて望月先生の夏の歌はと言えば…、先生は長い詞書きを添えて歌を詠まれる事が多い。夏の歌として「西瓜の歌」同音異義の風に乗せて」から二首選んでみたのだが。

姉園武司

・「北水の館」にたゆとうラ
フマニノフ ロシアの大地に
秘めし熱情
・マラーの「アダージェツ
ト」に身をゆだね慕（おも）
うあこがれ十八（とわ）の賢
治は
・「百年」の窓から出流（い
づる）ドビッシイー葉かげに
顔だすアンニユイな「午後」
・風もなき常の猛暑日思うこ
とロドリゴの曲熱砂の舞を

阿部真紀子

・起きてみて寝てみて暑いこ
の夏は主食がビールでつまみ
が冷酒
・かたまりの雲がほぐれて秋
の空その始まりはきつと風吹
く
・天を指す指の先から紅（く
れない）に染まって秋を告げ
る桜葉
・かたまりの雲をとばして風
が吹くらざれて羊ばらけて鰯

北田まゆみ

・園児らの紅きゆかたの隊が
来るさんさのリズムにのりて
来る来る
・遠き日の鬼さん役のかくれ
んぼまだ見つからず夕暮れと
なる
・潇洒なる展示ハウスに描き
置くパティオに集う空想家族
・いつどこで付けたのだろう
擦り傷を手首内側自傷のごと
し

小菅アイ

・わが家の部屋は遍く暑くし
て寝がたき夜のはや明けてゆ
く
・呆けむぞとグランドゴルフ
始めしが狙いに背くボールを
追ふて
・呆けむぞとグランドゴルフ
に熱中し紛れ当たりのホール
インワン
・天窓に額絵の如き赤い月怪
しいまでに輝きており

昆明男

・やわらかなただやわらかな
夏の陽に程よく冷えたビール
飲みたし
・わが町にひがな一日たばこ
吸い路上ながめし老人ありき
・約束の口開けですよとほほ
笑みて焼きかぜ差し出す女の
ありぬ
・マイルドな煙草といえど身
体にはマイルドじゃないセブ
ンスター吸う

佐藤静子

・なんだかもうどうでもいい
というような猛暑戻りの午後
の三時は
・古書店の奥には何やら秘密
あるひそりと灯る灯と黒い影
・なぜだろう空のぼんやり
かなしくて本田美奈子のア
ヴェ・マリヤ聞く
・「さびしい」と口に出（いだ）
せば本物のさびしさぐわつと
押し寄せてくる

田村依江

・木蔭なす木々の並木の心地
良く下行く人も心なごます
・雨来るか木々のざわめき風
も冷え走る電車の音もせわし
き
・うなだれて緑濃き葉の夏の
木は暑き日射をなんとぞ思う
・空有りと詠む人ありて見上
げしが空はシアンに広がる
のみ

望月善次

・崩れんとする瞬間の危うさ
を押し止めれば仮説誕生
・好物は天から（垂下）する
ものときながら白き天使のお
ゆび
・「男ありて」が 似つかわ
しくはなくつも滴りこそが
我らの「水瓜」
・繰り返す（挫折）はまるで、
自らが飛び込むように選んで
います

吉田直美

・嘘なんか教えていたら昭和
だね昭和がホントに遠くに
なった
・果たせない約束だけがその
時のたった一つの脚本だった
・銅製のワインクーラーの乱
反射揺れる光をぼんやり見て
た
・千年の夏を越え来た京都で
は御池の虫さえこっそりと刺
す

会 員 投 稿

賢治作品朗読——私の場合

石原 黎子

賢治の生地花巻の隣町で私は育った。地域語は花巻とほぼ同じ。平成の大合併で現在は花巻市になっている。つまり私は賢治と同じ言語のネイティブスピーカーということか。私が子供だった昭和30年代ころまで、地域語は賢治のころと根本的な変化はなかったはずだ。

「海だべがど おら おもたれば／やっぱり光る山だたじやい」(『高原』)「いしよけめに／ちやがちやがうまこはせでげば／夜明けの為が／泣ぐだあいよな気もす。」(短歌)。教科書も一般の書籍も、文字表記というものがすべてが共通語であることを自明と思い込んでいた小学生か中学生のころ、こんな表記の活字との出会いは清々しい驚きだった。表記の呼吸と、それによって自分の体の中に呼び覚まされる言葉の呼吸がピタリと一致する。しかも、生の「方言」の域を脱して詩の言葉として昇華している。これはもう声に出すしかないではないか。後

付けで今説明すればそんな気持ちだったろうか。

現在私が賢治作品の朗読を試み、時に人様に聞いていただいたりしていることの原点はこの辺にある。

「(あめゆじゅとてちてけんじゃ)」に始まり『無声慟哭』三部作中にちりばめられる一連の妹とし子の言葉、この地域語の絶唱は、渾身の思いで美しく切実に読みたいと思う。そしてこの三部作は、臨終のとし子への、賢治の胸張り裂けんばかりの語りかけである。これらは、とし子の言葉を除き共通語で表現表記されているが、「わたしたち(賢治ととし子……筆者注)」がいっしょにぞだつてきたあいだ(『永訣の朝』)使い親しんだ地域語が内包されているのを強く感じないではいられない。その呼吸に呼び覚まされるままに、地域語の発音・イントネーションを基調として私は朗読してみている。

『雨ニモマケズ』は、実は以前朗読を避けていた。やむを得ずの際は、共通語で淡々と読むしかできなかった。迫り来る死を前に賢治が、どんなに「サウイフモノニ」なりたいたと切に願ったか。その「ねがい」の強さと純度に私の心が付いていけなくていた。



朗読会にて (目白・ゆうど)

それが、数年前ある演出家による演劇ワークショップの席上、思いもかけず地域語で言い放ち得てしまった。その時私の置かれたシチュエーションは、地域語で語る一、二世世代前の老婆の私が、親を亡くした隣家の子を励ますというものであった。演出家氏から突然、「そこで『雨ニモマケズ』言ってー」の命令が飛んだ。とっさに、会場いっぱい野太い声で「雨ニモマケズ」と呼びかけたあれは、私に憑依した昔の老婆が私に言わたのだった……となにやら自分がイタコになったような気分陥ったのであった。

『雨ニモマケズ』を朗読するときは今でも少し老婆の助けを借りている。

イーハトヴ童話集『注文の多い料理店』と佐々木喜善

宮澤賢治センター幹事 亀井 茂

今年は『遠野物語』発刊100周年で、柳田国男と共に、柳田に話題提供し、また古里遠野にあつて民俗研究、昔話収集のパイオニアとなった佐々木喜善(1886―1933)も一層見なおされなければならない。

ここでは喜善の十年後輩で、ほぼ同時代、同郷岩手に住んでいた宮澤賢治(1896―1933)との係わりにつき、とくに賢治のイーハトヴ童話集『注文の多い料理店』出版の背景に、そのような喜善の影響がある可能性を指摘してみたい。

喜善と賢治の直接的係わりは晩年にあつたが、若い時代の係わりは余り知られていない。しかし喜善が賢治を知らなくとも、好奇心旺盛な賢治は早くから同郷の彼の活躍に注目、大いに影響を受けていたことは想像される。

喜善は北上山地遠野郷に生まれ、古里に受け継がれた昔話、風俗、習慣のもとに育ち、物心付いては文芸創作、作家たらんと一度は上京。当時は遠野・岩

手毎日・岩手日報など古里の各新聞に、小説、戯曲、詩、短歌など発表。また一流の文人達にも出会い、なかでも柳田との歴史の出会いは『遠野物語』(1910)を生み、後に遠野は『民俗学の聖地』とも呼ばれることにもなる。

一方、賢治は大正13年(1924)、イーハトヴ童話集『注文の多い料理店』を出版。そのとき古里岩手を地球規模で位置づけ、「イーハトヴ」は一つの地名である。ここでは有名な広告文を書き、またその童話集は「古風な童話としての形式と地方色を以てて類集したもの」と称し、賢治流童話の世界をもって、古里岩手をドリームランド、「イーハトヴ」と呼ぶ見直しをしようとした。

賢治は当時文化果て、貧しく厳しい風土の古里岩手で、生涯を送るからには、古里にあつて古里を越える自己克服、見直しが必要となり、従つて古里を「イーハトヴ」と見直すにいたる経過は、青春の混沌とした悩みのなか、家出するなど、人生の岐路を経ての到達点でもあつた。

一方、喜善もまた一度は古里を脱出、上京したが結局体調を崩し帰郷。それからは遠野郷の人として、大正3―4年頃より

文芸創作よりもむしろ地元の民俗研究や昔話の収集をはじめ。その後次第に昔話収集に本命を見出だしてゆき、一時は童話集としての出版も考えている。

まずその彼の民俗学的成果は、大正9年（1920）『奥州のザシキワラシの話』（玄文社）、また収集昔話は、大正11年（1922）、炉辺叢書の一冊『江刺郡昔話』（郷土研究社）となる。

このように一地方や山村の民俗、昔話が二冊の本となり、中央でもその価値を認められたことは、喜善の古里見直しであり〈古里再発見〉、〈昔話再発見〉でもあった。

そしてこのような先輩喜善に続くかのように、賢治も大正7年頃から童話を書き始め、10年には『注文の多い料理店』所収童話の7編も書き、また大正11年頃の作（？）とされる童話『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』には、喜善が当時現に住む遠野郷土淵村の隣村、青笹村伊藤宅にザシキワラシを出現させるなどして、早速『奥州のザシキワラシの話』の影響が認められ、当時すでに喜善を意識していたことを示している。

さらにこれに続く『江刺郡昔話』出版二年後の大正13年（1

924）、賢治は古里を〈イーハトヴ〉と見直す構想と共に、喜善の採取昔話の再話手法とは異なる、賢治流の「古風な童話としての形式と地方色とを以って類集した」という、イーハトヴ童話集『注文の多い料理店』の出版がなされることになる。

このように同郷の先輩喜善の〈古里再発見〉、〈昔話再発見〉の影響は、直ちに賢治に取り入れられ、新たな独創的イーハトヴの発想やその童話刊行に受け継がれたのである。

なお賢治がこのような童話集など書き始めた理由として、当時児童文学の隆盛期であったことや、国柱会で法華文学を勧められたことなど指摘されるが、さらに喜善の影響も加味すると、童話集の性格ともよりマッチするように思われる。

また、〈イーハトヴ〉の呼称は「創作されたエスペラント風の岩手県の異称」という。賢治のエスペラントへの関心は、岩手で最初のエスペランティスト、田鎖綱紀のエスペラント紹介文の影響（1916）とされるが、しかしこの造語そのものは、賢治脳裏に〈古里再発見〉者であり、エスペランティストでもあった喜善の存在を意識しての発想ではなかったかとも思われる。

「注文の多い料理店」考

青山学院大学
佐藤 亨

「この童話は、西洋化がますます進んでいた大正デモクラシーの時代に書かれました。作者の宮沢賢治は、外国の文化を取り入れるあまり自国の文化をおろそかにしてしまった当時の日本を非難し、国の行末に警鐘を鳴らしているのだと思います。」これは一人の大学生の「注文の多い料理店」解釈である（テキストは一九九〇年発行の新潮文庫を用いた）。学生いわく、「二人の若い紳士」は「すっきりイギリスの兵隊のかたちをし」、「連れてくる犬も「白熊のような」と形容され、日本の犬のようでない。さらに「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類」を身につけている。「みんなここに置いてください」と指示され、二人は従うが、二人が脱がされるのはまさに西洋的な装身具である。

また「白熊のような犬」も、物語の冒頭で「あんまり山が物凄いのので」「めまいを起して……泡を吐いて死んでしま」う。つまり、西洋文明は山に復讐されると。

物語の結末も同様である。二人の紳士は無事に東京に帰ったに思えるが、「泣いて泣いて泣いて泣いて泣き」、「がたがたがたがたふるえ」た彼らの顔は元通りにならない——「さつき一ぺん紙くずのようになつた二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした」。

顔が「紙くずのようになつた」紳士こそ西洋化した日本の比喩であり、日本はもう元の姿を取り戻すことはできないということだ、と。

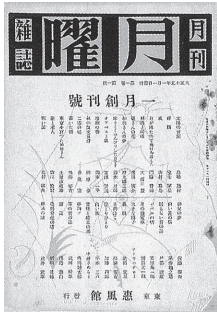
この説明を聞き、他の学生たちは「目からうろこ」というような顔をしていた。かの有名な「注文の多い料理店」の真意はこうだったのか。それにして、子供のころに読んだとき思ったこととあまりに違う、と口々に言う。また、紳士が料理店の注文に対していちいち自己流の解釈をしながら納得している点がいかに日本人っぽい、と語る学生もいた。

教室で賢治を読むと発見が多い。一人の発言がきっかけとなつていろいろと考えさせられる。右の解釈もその一つだ。それに沿うと、「西洋料理店」が「山」にあることはきわめてアイロニカルだ。「山」という文明から隔絶された場所にある「西洋」的空間、しかも名前が「山猫軒」(WILDCAT HOUSE)とは！ 狩猟目的の紳士は「山」で迷い、さらには「西洋」料理店の迷路のなかで多くの「注文」（非難）を受けするのである。

何が「明滅」しているのか 賢治と亀之助

吉田美和子

尾形亀之助は宮沢賢治に会ったことがあるだろうか。みづから生前の賢治に会いそ



「月曜」創刊号

こねて初七日法要に駆けつけることとなった無念の草野心平は、尾形亀之助研究家の秋元潔に「詩人として生前賢治に会っているのは岩手の人たち以外では石川善助と黄エイだけです」と語った。しかし仙台の亀之助の友人たちの間では、亀之助は賢治に会って失望し詩を書くのが厭になったと語った……、という風聞が流れていた。心平の手紙はそれへの反論である。

二人の生前の交流は『銅鑼』でページを隣り合わせ、亀之助が主宰した雑誌『月曜』に賢治が童話「オツベルと象」「ざしき童子のはなし」「猫の事務所」三篇を寄稿した——、それだけの関係であるらしい。賢治にとって亀之助は、未練を断って拒否しなければならぬ東京詩壇の一角であるにすぎない。しかし亀之助は賢治を意識している。「失望」とは、よしやそれが事実でなかったとしても、そこに夢を託したかった秘かな片想いのようなものの裏返しである。亀之助の作品を読み返すと、何故かそんな気配が感じら

れるのだ。

私は先ごろ、木屋社から上梓した『単独者のあくび 尾形亀之助』という本の中に『明滅』宮沢賢治と尾形亀之助』という一章を立てて、そのことを考えてみた。天沢退二郎氏も「ないないづくし」と語る二人の関係を、無理を承知で推論してみたのである。賢治が亡くなったとき、亀之助は岩手日報に「明滅」という追悼文を寄せた。その内容は未発表の「銀河鉄道の夜」のパロディとしか思えない奇妙なメルヘンである。賢治の枕元に残された書き込みだらけのこの未定稿の内容を、亀之助は知る立場にいたか。「明滅その二」は、酔って「宮沢ア」と叫んで泣く心平を励まして、銀河ステーションのような夜の町をふたりで腕を組んで「よっしょ、よっしょ」と走る物語である。

草野心平や石川善助の直線的で激情的な賢治への心酔に比べると、亀之助の心情は複雑に入りくんでシニカルだ。孤独な人間はときどきそんなふうだ。それは反語的な亀之助流の親愛と訣別の挨拶である。「みんなと欠伸するときでも彼は一人で欠伸をしたい」と心平をして言わしめた亀之助。虚無と無為の権化のようにして死んだこの詩人は、みんなのために、みんなの

ためにと悲泣して菩薩行を願った宮沢賢治の生き方と真逆である。しかし、疲弊した東北農村の同じ雨雲の下に資産家の嫡男として生まれた彼らの自裁のありようが、影のように背中合わせになっているとは、見えないか。文学報国会が結成された昭和十七年、亀之助は「大きな戦争がぼつ発してゐることは便所の蠅のやうなものでも知つてゐる」(絶筆「大キナ戦」)と呟いてひとり死んだ。

賢治・心平・亀之助——この「ないないづくし」の三角形は、読者を魅惑する不思議なミッシング・リンクであり続ける。仙台空襲でついにえた広大な尾形屋敷は、現在の仙台市西公園である。明滅しているものは詩人たちの夢である。

賢治の食べたリンゴ 食のビジョンを大切に

岩手大学教育学部准教授

田中 隆充

あるテーマの跡を追ひ、過去を調べることは面白い。トレーサビリティという言葉がある。主に「食品の生産から加工、販売までの過程を明確に記録し、商品からさかのぼって確

認できるようにすること」の意として使われていることが多い。例えばパッケージに印刷されているQRコードを読み取ると遺伝子組換えをしていない食品であるか否かを知ることができる。もともとトレーサビリティは食の安全を守るための仕組みなので生産者のモラルが大事だ。消費者にとっては口にする食品だけに情報が多ければ多い程、安心感が増す。

しかし、消費者は単なる加工や流通の過程を知って満足するだろうか？ お金を支払って買うと決断をする一瞬がある。数ある同じ種類の食材の中から我々は予算と相談し最後は「おもてなし」を感じた食材を無意識のうちに選択しているのではなからうか？

近年、パッケージに生産者の写真や名前が記されている食品もそのメッセージの表現だ。今や産地の表示だけでは購買の選択の要素としては不十分になった。トレーサビリティでは見えにくい、その地域の食に対する哲学や食づくりのこだわり等の要素を盛り込む努力をしなければ地域の食のブランド力は強くない。例えば、あるリンゴの生産者がいるとする。その生産者はどのようなリンゴづくりのポリシーをもってそのリ

ンゴをつくっているのであらうか？ 肥料も地元の堆肥を使ったか？ こだわりがあるのか？ はたまた、肥料は輸入に頼っているのか？ このリンゴが収穫された木の樹齢は？ その樹齢が15年であれば15年前の1995年当時の天候はどうだったのか？ 当時の気候は強い寒波が流れ込み、阪神・淡路大震災がおきた年である。その年に苗が植えられたリンゴであることを知って店で手認してリンゴを手にするのとは消費者のリンゴに対する想いが同じであるはずはなからう。

私の研究でタイムナビゲーションというのがある。携帯電話を活用し、その場の過去の景色を見ることが出来る。浄土ヶ浜(宮古市)にそのシステムを設置し、過去の津波の出来事を画像と同時に被災した方々の生の声を携帯端末から聞くことができ、未来の防災等の提言も示すことができる。このように跡をたどることは同時に今後のビジョンをも示すこととなる。トレーサビリティを構築することは流通の過程をさかのぼる要件と同時に、地方にとっては生産地という貴重な要素があるのだから、地域としての食のビジョンも構築できるはずだ。

東北各所には多くの独自性の

強い要素が潜んでおり、それを創造し展開させる知恵が求められる。岩手大学のある学生が前述したリングゴのトレーサビリティのあり方を岩手の独自性という観点から研究を始めた。

岩手県出身の宮澤賢治の哲学に沿ってリングゴを育ててみようという取り組みだ。リングゴのブランドづくりという商業的なこと以前に、食を育てる本質的な考え方を見直す手掛かりになればと思っている。宮澤賢治がリングゴを育てたならば、農業や化学肥料を使っただろうか？賢治が生きていた時代の夜空は満天の銀河が広がり岩手のどこかでリングゴをかじりながら星達と対話していたかもしれない。トレーサビリティなど必要なく安心してリングゴをかじったのだろう。

ちなみに宮澤賢治の研究者に賢治が食べたリングゴについて聞いてみた。「小ぶりで酸っぱいリングゴだったと思う」との回答だった。品種改良されて甘くなったリングゴの過程を盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）で農学を学んだ賢治は興味があるかもしれない。（『河北新報』2010年10月5日に掲載）

モリーオ童話とエスペラント

イーハトヴ・エスペラント会
今泉 久典

宮澤賢治がエスペラントを学び、その影響が作品にもあらわれていることはよく知られています。いまや岩手県のもうひとつの名前ともなっている「イーハトーブ」、あるいは盛岡を連想させる「モリーオ」といった賢治の造語もエスペラントが元になっていると言われています。

エスペラントは、諸民族が対等で自由に交流するための学びやすい国際共通語として、ポーランド生まれのユダヤ人医師ザメンホフが1887年に創案発表したものです。日本では、作家二葉亭四迷による入門書「世界語」出版等があった1906年から本格的な普及活動が始まり、本県関係でも賢治の他に、遠野物語の著者柳田国男、語り部佐々木喜善、日本語速記術の創始者として知られる田鎖綱紀などが熱心なエスペランティストで、国際連盟事務次長であった新渡戸稲造は強くエスペラントを支持した擁護者でした（詳しくは今年10月に日本エスペラント学会が発売した岡村民夫・佐藤竜一著「柳田国男・新渡戸稲

造・宮澤賢治 エスペラントをめぐって」を「ごらんください」。

私は学生時代にサークル活動でこの言葉を学んでいました。卒業、就職、結婚して家庭ができるという生活の変化の中で、エスペラントからは離れてしまっていました。

2003年、私は転勤で家族共々盛岡に赴任しました。そんなある日、偶然お会いしたのが、作家・賢治研究家でありエスペランティストでもある佐藤竜一さん（現岩手大学宮澤賢治センター事務局長）でした。お誘いを受けて竜一さんが副代表を務めるイーハトヴ・エスペラント会に私も入会、10数年ぶりにエスペラントの勉強を再開することになりました。

そんな私がときどき訪れていたのが「もりおか啄木・賢治青春館」です。第九十銀行の本店だったという重厚な建物の中に「石川啄木と宮澤賢治についての展示があり、その中には賢治がエスペラントを学んだことや佐々木喜善との交流等の説明もあります。

昨年、仕事で盛岡に出張した他県のエスペラント関係の知人がこの施設を訪問し「すてきな施設だったが、賢治の著名な作品の多くがエスペラントに訳されているのに、そのことが紹介されていないのが残念だった」

という感想をメールしてきました。そこで私は、自分が持っていた賢治のエス訳本を寄贈しました。その折、この施設で毎月1回、「モリーオ童話館」という朗読会が行われていることを知ったのです。女優でフリーアナウンサーの畑中美耶子さんが2004年3月から約100作あるといわれる賢治の童話作品の完全読破を目指して始められたものです。銀行の元頭取室だったという施設内の映像体験室で、毎回十数人の聴き手に向かって畑中さんの肉声で賢治童話の朗読が行われています。

初めて聴かせていただいたとき、盛岡弁のイントネーションによる畑中さんの朗読で賢治の世界に一気に引き込まれていき、賢治童話のエスペラント訳の朗読をぜひ賢治ファンに聴いてもらいたいという気持ちがあふくらんできたのです。そして盛岡で開催を招致することになった東北エスペラント大会での一般公開行事として、賢治童話のエス訳作品の朗読紹介を行うことを企画し、畑中さんに記念講演をお願いいたしました。

2010年11月7日(日)、第51回東北エスペラント大会の一般公開行事「モリーオ童話とエスペラント」が盛岡市のアイーナ7階・岩手県立大学アイーナ

キャンパスで開催され、一般市民の方も含め40名以上が出席しました。私を含めたイーハトヴ・エスペラント会会員3名が「注文の多い料理店」「銀河鉄道の夜」「セロ弾きのゴーシュ」の一場面を日本語とエスペラントとの両方で朗読しました。そして畑中美耶子さんは「私とモリーオ童話館」と題して講演され、ご自身がアナウンサーを目指したきっかけ、長年続けた子供劇団のこと、そして盛岡弁で「賢治さん」の童話を朗読する「モリーオ童話館」へかける思い等をユーモアを交えながら語っていただきました。「二人の役人」の朗読もご披露いただきました。賢治童話のエスペラント訳朗読を聴かれて、もし賢治が自分自身で童話をエスペラントで書いたとしたら、「ざわざわ」「どろろ」「どたつと」いうようないわゆる「擬音」をどのように表現したのだろうかという感想をいただきました。

宮澤賢治が私をエスペラントの世界に引き戻し、エスペラントをきっかけとして賢治の世界の奥深さに触れることができたというのはおおげさすぎるかもしれません。いずれにせよ、これからもエスペラントとモリーオ童話の世界にかかわっていければと思っています。

宮澤賢治センターのロゴマーク

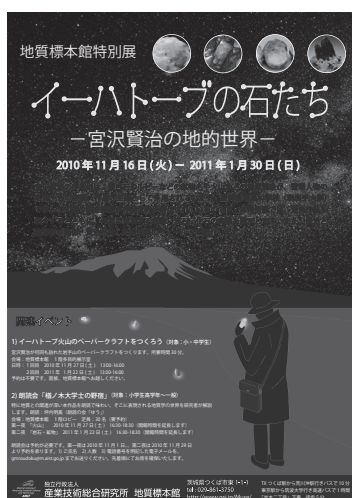
宮澤賢治センターのロゴマークが完成しましたので、ここに紹介いたします。



宮澤賢治の代表作「雨ニモマケズ」をスタンプに見立て、改めて賢治の想いを多くの人々の心に刻み込む。

作成者：アートフォーラム
中島香緒里

特別展の御案内



イーハトーブの石たち —宮澤賢治の地的世界—

2010年11月16日(火) - 2011年1月30日(日)



施設サインイメージ

編集後記

▽私がこの通信の編集を担当するようになって2号目ですが、この号では多くの会員から投稿を頂きました。それぞれの文章には賢治に対する思いが満ちあふれており、改めて賢治の文学が内包する奥深さに感じ入りました。

また、これまでタブーともしられた賢治の恋愛に切り込んだ澤口たまみさんの『宮澤賢治 愛のうた』に関し、森三紗さんに書評をお願いしました。

最近澤村修治著『宮澤賢治と幻の恋人』（河出書房新社）も出て、「恋人論争」が活発化しつつあるようです。くめども尽きない鉱脈をさらに掘り起こすためにも、積極的な投稿をお待ちします。

（佐藤 竜一記）

宮澤賢治センター通信

〇発行

〒020-0855

盛岡市上田四丁目三番五号

電話 〇九六二二六六七二

FAX 〇九六二二六四九三

E-mail: kenji@iwate-u.ac.jp

HP: http://kenji.geciwate-u.ac.jp/

宮澤賢治センター(岩手大学内)

発行責任者 岡田幸助

〇印刷 杜陵高速印刷株式会社